福島県外避難者支援のための情報紙

いこい通信

復刊
第３号
2018 年 12 月

発行　一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム

「いこい通信」は、宮城県内で避難者支援にあたられている方々に、福島の復興の現状や福島県外避難者の置かれている状況、宮城県内における支援活動の様子等をお伝えする情報紙として発行しています。自らの意思に反して、全国への分散避難を余儀なくされた方々が、避難先で適切な支援につながっていくための一助となることを目的としています。

■ 福島県から避難されている皆さんのサロンを開催しています（その１）

当コンソーシアムでは、**福島から宮城に避難された皆さんが日常的に交流を深めることができる場をつくるため、誰でも気軽に参加できる「ふくしま仙台駅前サロン」を 2018 年５月から定期的に開催しています。**サロンの様子をシリーズで紹介します。

サロン「ちぎり絵教室」は、双葉郡浪江町出身で、震災時には南相馬市小高区にお住まいだった猪狩良子さん（今は宮城県内にお住まい）を先生にこれまで３回開催されました。

2018.6.6　先生の紹介

2018.7.18　作業の様子

ちぎり絵の材料には新聞紙を使います。先生がお持ちになったお手本（それぞれの季節の風物がテーマになっています）を参考に、新聞のカラーの部分を切り取り、のりで貼っていきます。

最初は皆さん手探りで始まりますが、徐々に手馴れてきて、毎回きれいな作品ができます。

新聞記者の方も「新聞にこのような活用法があるとはびっくりです」と驚かれていました。

作業の後には、食事やお茶をしながら交流を深めます。宮城での生活の近況や、故郷の復興の動きなど、毎回話題は尽きず、貴重な情報交換の場になっています。

このサロンは、独立行政法人福祉医療機構（WAM）による「平成 30 年度社会福祉振興助成事業」の助成を受けて開催しているものです。

2018.11.7　作品と一緒に記念撮影

楢葉町の復興状況について

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故の影響で、第一原発周辺のエリアには震災直後から避難指示が出されていました。その後の除染や復旧・復興事業の進捗により、2014 年から避難指示が順次解除されています。

各地の復興状況は、被災の程度や避難指示解除の時期等により異なっていますので、本通信で概要を逐次お知らせします。今回は、楢葉町の復興状況についてご紹介します。

楢葉町の概要

楢葉町は、福島県浜通りの中央に位置し、東は太平洋、西は阿武隈高地、町内にはサケの遡上や鮎釣りで知られる木戸川、井出川が流れる恵まれた自然環境を有しています。寒暖の差が少なく、年間を通じて過ごしやすい気候で、震災前の産業は農業を主体に、「J ヴィレッジ」やサケ漁、鮎釣り、温泉施設などを中心とした観光も注目されていました。

なお、震災前の国勢調査（2010 年）の人口は 7,700 人、高齢化率は 25.9%、市町村内総生産は 877.5 億円（2015 年度福島県市町村民経済計算年報による）でした。

伝統の合わせ網漁によるサケ漁（楢葉町資料より）

楢葉町の被災・復興状況

楢葉町の北側、大熊町と双葉町の間に東京電力福島第一原子力発電所が立地しており、楢葉町の主要部が福島第一原発から半径 20km の範囲に含まれます。また、楢葉町の北部には福島第二原発が立地しています。

東日本大震災では、震度 6 強の揺れと、高さ 10 メートル以上の大津波に襲われました。さらに福島第一原発の事故により全町避難を余儀なくされ、町民はいわき市をはじめ福島県内や県外各地での避難生活を送ってきました。

一時期は町全域が警戒区域・緊急時避難準備区域に指定されていましたが、2015 年 9 月に避難指示が解除され、町内の復旧・復興事業が進められるとともに、4 年半にわたり避難生活が続いていた町民の帰町も進んでいます。楢葉町では、町民の多くが生活圏内であるいわき市に避難していたこともあり、町民の帰還が周辺市町と比較すると早いペースで進み、2018 年 11 月 30 日現在、住民基本台帳人口 6,982 人の 52%に相当する 3,599 人が楢葉町内に居住しています。

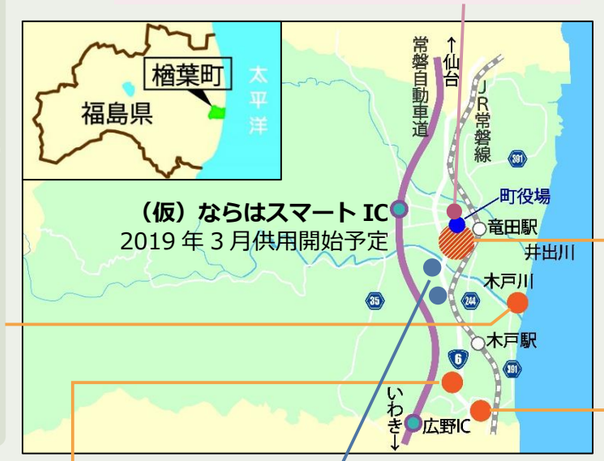
避難指示区域の概念図（2017 年 4 月 1 日時点）
（福島県ホームページを参考に作成）

楢葉町のいま

楢葉町は、原発事故による放射線汚染の程度が比較的低く、避難解除の時期が早かったことから、ハード面での復旧・復興事業は比較的順調に進んでいます。現在は、コミュニティの再生、心の復興、産業の再生・新産業の育成等が課題となっています。

学校再開
2017 年 4 月に町内に小中学校・こども園を再開。小中学校同一校舎で連携型教育を実施。

天神岬公園津波防災対策ビューポイント
津波による被害が甚大であった前原・山田浜地区を一望でき、震災の教訓を後世まで伝える拠点として整備されました。
隣接する「天神岬スポーツ公園」も芝生の全面入れ替えや遊具の新調等を行い 2016 年に再開しています。



復興の新拠点　コンパクトタウン「笑ふるタウン」
暮らしの再生・新たな生活拠点として、140 戸の災害公営住宅や宅地分譲地、スーパー・ホームセンターなど 10 店舗からなる商業施設「ここなら笑店街」（2018 年 6 月オープン）、交流館（2018 年 7 月オープン）、診療所・歯科医院等が集積・整備されました。

みんなの交流館ならは CANvas
外観（下）と内部（左）

道の駅ならは
駐車場とトイレのみ再開中。2019 年春再オープン予定。

農業の復興
震災前は基幹産業のひとつであった水稲の復興に向け、穀物の乾燥・調製等を行うカントリーエレベーターや育苗施設を建設中。年内に完成予定です。

J ヴィレッジ
楢葉町と隣接する広野町にまたがって立地しているスポーツ施設「J ヴィレッジ」は、2018 年に一部使用再開、2019 年全面再開予定。JR 常磐線の臨時駅「J ヴィレッジ駅」（写真左）も建設途中で 2019 年 4 月開業予定です。

■ 福島県から避難されている方々の支援に関わっている団体の情報交換・合同視察会（北海道・東北ブロック）を開催しました

福島県から北海道・東北ブロック（北海道・青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県）に避難されている方の支援に関わっている団体の担当者を対象とした情報交換会／合同視察会を、2018 年 11 月５日（月）～６日（火）の２日間にわたり、福島県双葉郡内にて開催しました。

避難元地域からの支援が縮小する中、避難者を受け入れている地域側の取り組みがますます重要になります。この会は、日頃、各地域で避難者支援にあたっている民間支援団体の担当者が顔を合わせて支援の現状や課題について認識を共有、今後の方向性について議論を深めることで、支援活動の深化を図ることを目的に開催したものです。

情報交換会（11 月５日）の様子

会には、各民間支援団体から 14 名が参加しました。11 月５日の情報交換会は楢葉町内の「ならは天神岬温泉しおかぜ荘」の会議室を会場として、「避難先へ定着される方への支援のあり方について」をテーマに行われました。個別の避難者への支援については、

・避難先への定着を考えていらっしゃる方でも、個々に状況が大きく異なり、**個別の事情をどれだけ把握して支援するかが重要。**

・避難先の支援につなぐ場合でも、自治体による施策の差が大きい。つなぎ先の専門性の縦割りが強く、**避難者の抱える問題の背景や本質が伝わらない**場合がある。

といった課題が、避難者どうしのつながり（コミュニティ形成）については、

・避難当初からある**避難者サロンは活動が低調に**なる一方、避難先のサロン等にはなかなかつながらない。

・**定住を決めた同郷者どうしのつながり**（サークル・交流会）が必要とされている。

といった論点が出されました。

「ならはCANvas」内見学の様子

翌６日の合同視察会では復興交流拠点「ならはCANvas」を会場に、楢葉町のご担当の方より復興状況についての講話をいただいた後、町内の復興拠点「笑ふるタウンならは」や工業団地、J-ヴィレッジ等楢葉町内の復興状況の視察と、楢葉町と富岡町にまたがり設置されている特定廃棄物（放射能濃度 10 万 Bq／kg 以下の廃棄物）埋立処分施設の見学を行いました。

この会は、東北ろうきん復興支援助成金（東北労働金庫）および公益財団法人大阪コミュニティ財団『東日本大震災及び原発災害からの復旧・復興活動支援基金分野１』助成金による助成を受けて開催しました。

【発行者・連絡先】
一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム
〒984-0065　宮城県仙台市若林区土樋 254 ニューメゾン土樋 201
電話：022-353-7550　FAX：022-397-7230
メール：info@tohokuconso.org　　Web：http://tohokuconso.org/

「いこい通信」は「宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業」補助事業の一環として発行しています。